

Title	「(続)パガン時代」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 17 p.67-p.88
Issue Date	1967-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80277
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「(続) パ ガ ン 時 代」

服 部 正 一

“Pagan Hket (Continued)” by Masaichi Hattori

နိဒါန်း

န မေတ္တဿာဂဝ တောအရဟတောသမ္ဗုဒ္ဓဿ

(ဂဏှတိ) ဘိက္ခုနီ ဇေယျသား ချေးသော (ပုဂံခေတ်) ကိုယ်လက်
ဇေယျသား မည်ဖြစ်သဖြင့် (ပုဂံခေတ်သောင်း ပါး အောက်) အမည်နှင့်
ပင် တင်ပြအပ်ပါသည်။

ပုဂံမင်း ဆက်တွင် ငွေမြှောက်သောမင်း ယုတ်မင်း ဆိုး ဖြစ်ခဲ့သော
နရသူမှစ၍ ပုဂံရာဇဝင်ကိုရှင်း လင်း ဘော်ပြသွား ပါမည်။ ဤခေတ်အ
တွင်း တွန်း ကား ယင်ပေ ခဲ့သောမင်း များ မှာ၊ အနော်ရထာမင်း
စောမှစ၍ ကုန်စစ်သား အလောင်း စည်သူမင်း မြတ်တို့ နှင့် နိုင် ယှဉ်
လျှင်ယုတ်နိမ့်သောမင်း များ ဖြစ်ပါလေသည်။ သို့ ဘော်လည်း မင်း စင်
မင်း ဆက်အဖြစ်အပျက်များ ကိုအများ အား ဖြင့်ဝတ္ထု ဘတ်လမ်း သဖွယ်
ရေး သား ထား ပါသည်။

နရပတိစည်သူအစိုး ရတော်မူစဉ်သီတိုင်းနှင့် မြန်မာ နိုင်ငံသတ်တိုင်
ငံနှင့်တိုင် များ စွာကူး လူး ဆက်ဆံခြင်း ရှိခဲ့သီတိုင်း ဗုဒ္ဓဘာသာ
လွှမ်း မိုး ချောသာသနာ တော်လည်း တွန်း ကား ခဲ့လေသည်။

မြန်မာရာဇဝင်သရဏများ ရေး သား ခဲ့သောစာအုပ်များ နှင့်
အင်္ဂလိပ်ရာဇဝင်သရဏများ ရေး သား ခဲ့သောစာအုပ်များ ကိုနှိုင်း
ယှဉ်ကြည့်သော်တော်စပ်စပ် ခြုံချီ တွဲနေသည့်အကြောင်း အရာများ ကို
ပြု၍ အောင်အံ့ အပြန်ဖြစ်စွက်ကြည့်သည်။ တရုတ်သရဏများ နှစ်မြန်မာ
ရာဇဝင်စာအုပ်များ ကိုကား အလျင်း မှအမှီမပြုရသေး ပါ။ ငင်း တို့
ကို နောက်ကာလတွင် သေချာစွာ စုံစမ်း စိစစ်ရန် ရည်ရွယ်ပါသည်။

ထိုသို့သောအဖြစ်အပျက်၊ အကြောင်း အရာ၊ ဝတ္ထု တို့ တွင်အဓိက
သဖွယ်၊ ယုံကြည်ရန် မလွယ်သောအချက်အလက်များ လည်း ပါလေရာ၊ ထိုအချက်
အလက်တို့ကို (သောတုဏ်) (ဟုဆိုသည်) ဟုသောစကား မျိုး တို့ဖြင့် ဘော်ပြ
ထား ပါသည်။ ဤသို့ သောအချက်အလက်တို့ကို မမှန်ဟုမူလုံး ဝင်ြင်း ပယ်စရာ
အကြောင်း ကား မရှိ၊ သက်သေအခိုင်အမာမရသေး ၊ သက်သေရှာရန်လို
သေး သည်။

ငွေမိုး ငွေမိုး ရွာသကဲ့သို့ သောစည်း စိစစ်ကောင်း စား မှန်စား
လျက်ရှိခဲ့သောပုဂံခေတ်သည်လည်း နောက်ဆုံး ခြုံပျက်စီး ဆုံး ပါး ခြင်း သို့
ရောက်လုချိန်နီး လာ တော့သည်။ ထိုကောင်း စား ခြင်း နှင့်ဆင်း ရဲခြင်း
လက္ခဏာသည်ပုဂံမင်း များ ဆောက်တည်ခဲ့ကြသောဘုရား စေတီတော်များ
၏ ပုံစံတွင်လည်း တွေ့ မြင်နိုင် လေသည်။

ま え が き

前回の「パガン時代」に引続き本論文では、「(統)パガン時代」と題して、パガン王朝第46代の悪王ナラトウよりはじめる。この時代に出現する歴代の王は、先王アノーヤター、チャンジッター、アラウンシートウ等の秀れた大王に比すれば、その人物において見おとりするが、ビルマ人としての性格を表わしている点をかなり鮮明に画いた積りである。

また新しい教義がセイロンより移入されて その時まで行われていたシン・アラハンの教義に新風が巻き起される。即ち新僧団の出現である。尙ビルマ人史家の著述に不足している点を英人史家の著述の中よりそれを補い、中国側の資料については未だ全くふれていない。今後の研究に委ねる。

ビルマ史を通じて、しばしば見られる、信じ難い伝説的な物語を如何に扱うべきか。このような時代錯誤に満ちた物語をも非科学的な事件として一蹴することなく、現代のビルマ人の心の中に古き信仰として生きていることを認めるべきであると思う。この原水爆の時代にも民間信仰というものは、ぬき難い力をもって現代に生きているのである。

最後に、隆盛を極めたパガン時代も末期に近づきつつ、歴代王朝の建立になるパゴダの種々な様式のうちにもパガンの盛衰がうかがわれる。

第46代ナラトウ王 (Narathū, 1167—1170年)

父君アラウンシートウ王を殺害して王座に即いた ナラトウの事を聞いて兄の ミンシンゾーはナラトウを撃つべく軍を起してパガンへ向った。

奸智にたけたナラトウは兄が進軍してくることを聞いて、パガン中の人々が 仏陀の如くあがめるパンタグー大僧正に近づき、「大僧正よ、兄弟が相戦うことは国民を困難に落とし入れることになりましょう。私は兄に反抗したくありません。兄上に王位をゆづりたいのです。それで平和のうちに都へ入城して貰うように計っていただきたい。」と懇願した。僧正も、「私は仏に仕える身である。政治には関渉したくない。もしあなたの言葉が真実でなければ、私は大きな罪を背負うことになるでしょう。」と言った。ナラトウは「心配なきよう。」と固く誓った。そこでパンタグー大僧正も彼の言葉を信じ、ミンシンゾーの元へ赴き、そのことを話すと、ミンシンゾーも他ならぬ大僧正の口から聞いたことであるので弟の言葉を信じた。

ナラトウは言葉通り、静かに兄を迎えて彼に王位をゆづった。しかし、その夜、宴会の際に毒を盛り、ミンシンゾーを死に到らしめた。

翌日ミンシンゾー毒殺の件を聞いて、パンタグー大僧正は宮廷に赴き、王に会って「邪悪にして穢らわしき王よ、短きこの世の榮華にのみ氣をとられ、長き永遠の災厄を恐れぬのか、また私の面目を考慮せぬのか。」と憤慨して云った。ナラトウは冷然として答えた。「僧正よ、あなたに誓った通りに私は兄を王位に即けたではないか。」しかし、僧正は動ずる氣配もなく、「あなた程愚かな王はこの世の中にはいない。あなたのような悪王の支配する国には私は住みたくない。」と云い残して憤然として宮廷を去り、セイロンへ向った。

このように国中の人々が敬っていたパンタグー大僧正がセイロンへ去ってしまったことを聞いて、*貴族高官たちや国民、僧侶たちはみな不安にかられ、ナラトウに対して不満不敬の念がつのり、憎しみをもつようになった。

* ビルマには世襲による貴族制度はなかった、故にビルマ語でいう a-hmu-a-mat (貴族大臣) は王に任える高官を指すのである。

ナラトウは悪行によって蓄積して得た富を悪行によってなお引続き楽しもうとしたが、それを欲しない王子、王妃をはじめ、その同族たちや大臣高官等を次々と暗殺し、また一般国民を搾取した。また、彼は僧侶を虐待したが、その理由は、私の考えでは、ビルマの仏教僧は王やその他の権力者に対しても決して遠慮気兼ねなしに自分の意見を述べ、彼らに悪行があれば容赦なくそれを指摘したからであろう。アノーヤター王時代にシン・アラハンが当時の権力者であったアリー教僧に対してとったりっばな態度、また、パンタグー大僧正がセイロンへ向って去る前にナラトウ王に向かって言った言葉などからもうかがわれる。従って、ナラトウは僧侶たちが国民を扇動して自分に対して反抗の氣配を示しはしないかという不安をいだき、次のような虐待方法をとったことをウ・オン・マウンは記している。「王は僧侶たちを還俗させる手段として、王の妾や宮廷の女官たちに彼らを誘惑させたり、身体のおもなものは兵士に徴発し、不殺生戒を破らしめた。また、寺院を宴会の場所としたり、一般女性たちに不適當な服装を強制した。云々」

ここで考えられることは、アノーヤターやチャンジッターの如き国民に信望のあった国王は仏教僧を敬い、彼らとすべての点において妥協したが、国民の間に悪名高い王は僧侶を虐待したことである。ビルマでは僧侶を虐待することは国民を虐待することである。というのは国民にとっては僧侶はその代弁者と見なされているからである、と思われる。ビルマの仏教僧に関する限りでは、彼らは俗界に勢力を張ろうとするような政略的な意図は全くなく、その勢力は道徳にかなったものである。

ナラトウは彼が思っていたほどには決して榮華を楽しめなかった。責任が重く、心も愉快でないことを彼は悟った。

ダンマヤン寺院の建立

ナラトウは心に平安を得るためにダンマヤン寺院 (Dhammayangyi:-hpayā:) を建てた。その建立に際して、彼は工事を急いで人々を酷使したため彼らは炎熱下の重労働に苦んだ。ある時は煉瓦と煉瓦の間に1本の針ほどのすき間ができたという理由で石工を処刑したそうである。

ダンマヤン寺院はチャンジッター王の建立になるアーナンダー寺院と同一の設計にて建てられたものであるが、これにはアーナンダー寺院のもっような明朗さも優雅さも全く感じられない。ハーヴィはダンマヤン寺院に関して、「建物全体の感じはいかにも陰惨であって、その細長い円天井の陰うつな深さの中に良心の空洞が見られ、物の氣に憑かれたナラトウの無気味な妄念の呻きが聞える。」と語っている。

前述した(学報16号, 72頁) パティッカヤの妃は宮廷内に寄寓していたが、かつて王が用便後、手を洗浄しなかったことを、そのインド王妃は彼女の国の習慣によって、それを嫌悪し、王の側に近寄ることを避けたので、王は怒り、もっていた剣で彼女を斬り、死に至らしめた。王は自らの非道な行いのためにその因果に苦んだ。

彼が在位3年にも満たないうちにすでに報復の手は彼の身近かに迫っていたのである。彼女の父であるパティッカヤの長は彼女がナラトウによって斬られたことを知り、密命によって8人のインド人をバラモンに扮装させて宮廷に入り込ませ、ナラトウを暗殺させた。それが終ると、彼らは互いに刺しちがえて相果てた。このようにインド人の手にかかって倒れたので、ナラトウ王はカラーチャミン (Kālā:-gya-min: = 「インド人の手によって倒れた王」の意) と一般に呼ばれている。

ビルマ史において自殺についての記事は、ナラトウ王を暗殺したこれら8人のインド人の場合と、パティッカヤ王子がシュエエティとの失恋の末に自殺した場合とであって、(今のところ、この二つの場合を除いて私の記憶にない) いずれもビルマ人でなく、インド人であることに注意すれば、ビルマ人の自殺というのは皆無とは言われないにしても実に稀であるように思われる。かつて、日本に来たことのあるビルマ商人が「日本の新聞記事には自殺が実に多い。」と言っていたが、ビルマ人の自殺の稀な理由は現世を尊ぶビルマ人の民族性にもよるであろうが、彼らの心に侵透せる仏教思想にもよるものであろう。

第48代ナラバティシートゥ (1173—1210)

カラーチャミン、即ち、ナラトウの後、その息子ナラティンカ (Naratheinhka) (1170—1173)

が王位に即いたが、この王は3年間の在位の後、その弟ナラパティシートゥの妃を不正な手段にて自分のものにしたため殺害された。

そのいきさつを述べると、ミンザイン(Myin Zaing:)地方よりピョ族(Pyaw.-lūmyō:)の娘ウエルワティーという女をナラティンカ王に献上して来たが、Hmannan: Yāzawinによれば、「この女は美人ではなく、耳が大きくて、お腹が脹れている(*won: pyet)と云って、ナラティンカ王は弟のナラパティンシートゥに彼女をゆづった。ナラパティンシートゥと共に住んでいた彼の母はその女を見て、手入れをすれば美人になる素質をもっていることを見抜き、彼女の耳をちょうどほどよく切り、美容を整えると以前の彼女とは全く異ったすばらしい宮廷にふさわしい美女となった。」

* won: pyet は現代語では「慢性の下痢にかかっている。」即ち、Judson の辞書では= “to be subject to chronic diarrhoea” と訳されているが、この場合は「お腹が脹れている(妊娠しているのではない)」即ち、“won: kē di” (=to be distended) (U Hpō: Kyā:) の意味である。

その後、美しくなったウエルワティーを見たナラティンカは彼女に心を寄せるようになり、ある日、弟のナラパティンシートゥを欺いて、「ンガサウンジャン(Nga-hsaung-gyan:)に暴動が起きたので、それを取りしづめよ。」と弟に命じた。ナラパティンシートゥは兄の言葉に不信な点のあることを感じて、彼の忠実な僕であるンガピ(Nga-Pyi)を見張り役としてパガンに残し、宮廷に異変があれば、急いで知らすようにと言いつけて、彼は軍をひきいてンガサウンジャンへ向った。しかし途中にて、ンガサウンジャンは無事平穏であることを聞き、自分が謀られていることを知り、ンガパッチャウンという河のほとりにしばらく陣をしいた。

一方では、ナラパティンシートゥが出発した後、ナラティンカは弟の妻であるウエルワティーを奪った。そのことを主人に知らすためにンガピは早馬を飛ばした。そしてンガパッチャウン河へ達した時、疲労のためその河岸にて寝てしまったが、向う岸には彼の主人が陣をしいていることを知らなかった。彼が乗ってきた馬はその主人の臭いをかいで、嘶いたのをナラパティンシートゥは聞いて、自分の持馬であることを知った。夜が明けてンガピは主人に会い一部始終を話した。妻をいたわるナラパティンシートゥは「かかる重大な事柄を知らすのを差しおいて、向う岸にて一夜を明かしたとは何事であるか。」と憤ってンガピを処刑してしまった。ンガピはミンビューシンナツ(Myin:-byū-shin-Nat=白馬の騎神)として現在でも上ビルマに祀られているそうである。

ナラパティンシートゥは家来のンガアウンゾワ(Nga-aung-zwā)に命じて80人の手兵をあたえ彼の兄を撃たせた。その際、もしそれに成功すれば、ンガアウンゾワに兄が娶っていた3人の妻の中で彼の望む女の1人と結婚させ、その上彼をThū-gaungに取立てることを約束した。Thū-gaungとは高官に任用することを条件に無報酬にて王に任える官名であった。

ナラパティシートゥはウェルワティを妃として王位に即いた(*Abhitheit hkan)。約束通り、兄の妻の1人をンガウンゾワにあたえようとしたが、女たちは涙を流して哀願したので王はンガウンゾワに、「朕が約束したことは事実であるが、しかし、そうすることは正しいことではないから、国民のなかから他の娘を世話しよう。」と云ったところ、ンガウンゾワは王に対し、「トウィー (Htwee=あざけりを表わす感投詞)」と言って、横へいな振舞をしたので王はたちどころに彼を処断した。

* Abhitheit (<P. abhi=excelling+seka=pouring, または, abhisitta; Sans. abhisheka.) は王及び王妃の戴冠(即位), または, 高官の就任, または, 国に功労のあった人に行なわれる儀式であって, 8人のバラモンによって, 祝福される人の頭上に, 時には手の上に, 聖水が注がれる。Judson の Bur-Eng Dict., Appendix A, Note 50, P. 1070 には即位式に際して次の如く説明されている。

"Myanma-shinbuyin di yāzā pallin hnaik htaing ywe, mihpāyā : gyī : let go twè dā hpyiñ amat apaung : hkyan yan lyet, ponnā : shit yauk dō di hkāyu thin : dwiñ ye hñiñ tha-pye myezā hkunit nyuñ zī hte lyet, aung ze ya tuzeya tu aung ap thaw mingalā di aung myiñ di hpyit ze tha ti : hu hso pyī : hlyiñ, bhithheit thon : kon i. (ビルマ王は王座に坐し, 第一王妃の手に彼の手を重ね置き, その周囲には大臣たちが取囲み, 8人のバラモンが7本のユーヅニアの木の小枝と7本のミエザ草に水を注いで法螺貝の中へ入れる。それから, "征服者に勝利の祝福あらんことを。" という言葉を発して, 注水式を行う。)

また, この式は必ずしも王や貴族高官等のみに対して行われるとは限らない。商人に対しても, また, 王がりっぱな馬を手に入れた時に馬にもこれを行うことがある。Ath. D. K. 41には, "Myiñ : go abhitheit thon : ywe, mingalā myiñ : zaung : daw hnaik htā : lyet,……" (馬に注水式を行い, 王の馬小屋にそれをつないで, ……) と述べられている。

アナンタトゥリヤ大臣 (Ananta-thūriya amat)

また引続き, ナラパティシートゥ王は兄ナラティンカ王の後見人であったアナンタトゥリヤ大臣をも兄との関連によって処刑を命じた。勇気と沈著の人であったアナンタトゥリヤは死の直前, 怒りを和げるため4音節詩(Amyet-pye-lingā-lē : -pod)を書き, 王に捧げるように言い残して世を去った。その第1節のみを引用すれば,

Thū ti : ta-yauk,	ある人は
kaung : bō yauk mū,	栄えの道に至るも
thū ta-yauk hmā,	またある人は
pyet lin kā thā,	滅びの道を歩む
dhamma tā ti :	これぞ人の世の慣い。

アナンタトゥリヤ大臣が勅命によって処刑される寸前に詠んだこの詩は多くの人々の心に銘記するに足る真理を含んでいる。ウ・ペ・マウンティンはこの詩を「人の身体や地位, 財宝等のうつ

ろい易い無常の法が真実であることを悟り、まさに今死んで行かねばならぬ時に 自分自身が直面している事態を詠んだために読む人の心を打つものがあり、短いながら見事な 出来ばえである」と評している (Myanma Sāpe Tlamaing :, p. 11, 12)

この種の詩は Lingā と呼ばれるのであるが、各行共 4 音節から成っている。押韻形式は 1 行目の最後の語と 2 行目の最後より 2 つ目の語及び 3 行目の 最後より 2 つ目の語と 韻を踏んでおり、3 行目の最後の語と 4 行目の 最後より 2 つ目の語及び 5 行目の 最後より 2 つ目の語とが韻を踏んでいる。即ち、

Thū ti : ta-yauk,
kaung : bọ̌ yauk mū,
thū ta-yauk hmā,
Pyet lin k̄ā thā,
dhamma t̄ā tī :
— — — A
— — A —
— — A B 'key' line
— — B —
— — B —

となっている。

その詩を王に献じたところ、王はアナンタトゥリヤに同情し彼を許すようにと言ったが、その時はすでに処刑が終っていた。王はそれを聞いて大いに後悔し、「今後、朕が怒りのために命じたことであっても、1ヶ月の余裕をもって慎重に調査した 上にて処刑させよ。と王族の一人に当るマハータマン大臣に命じたということである。

ナラパティシートゥ王は兄ナラティンカを撃った時容易に 成功したことに鑑んがみ、自分の身を安全にするために宮庭の内外に多数の護衛兵を配置し、鶏の入るすきまもないほどに厳重に警戒させた。

また、国民が税として納めた金、銀、米穀等を保存する倉庫を宮廷の周囲に建てて、600人の事務官に監督させ、年中1日も欠かさず調査し、管理させた。その在庫品は、フマンナンヤーザウインによれば、米、金、銀、各種宝石、赤銅、白銅、鉛、鉄、繻子、ビロード、絹、じゃ香、象、馬等であった。そして、護衛兵をはじめ、象兵、騎馬兵、役人たちに糧食や衣服を与え、妻帯者

には扶養手当を、また時期に応じてボーナスまで支給したそうである。

このようにナラパティシートゥ王は部下に対して思いやりが厚かったことがうかがわれる。

その後、ウ・ボ・チャーの記するところによれば、ナラパティシートゥ王は彼の義兄弟に当るトゥバヤッ (Thubhayat) の妻に思いをよせ、彼女を我がものにした。そして王の二人の妾をその代りとしてトゥバヤッにあたえたが、しかしその罪は消えるものではなかった。

王はスラマニ・パゴダを建てるためにくぼみの地面の工事に人々をはげしく使役したため彼らは重労働に苦しんだ。折しも、セイロンより帰国したパンタグー大僧正は「信者である大王よ、功德を施こそうとしてそれが功德にならず、返って、ああ、罪となる。このように国民を苦しめるならば、私は王の施しを受けることを欲しない。」と言った言葉に対して王は、「大僧正よ、我が施しを受けたくなければ、我が国に住むには及ばないであろう。」と言った。僧正は、「よろしい、あなたの国には住まない。セイロンへ行こう。」と云って立去った。僧正が去った後、王が部屋を出ようとすると、戸口の見張り——ウ・ボ・チャーの「ビルマの史」では Bilā: (鬼) となっている——が戸口に立ったまま動かず、王の進行を妨げたということである。その理由を王は学者たちに尋ねると、王が僧正に対し不敬な言葉を行ったからであると答えた。

王は自分の言った言葉を恥じて後悔し、部下たちに僧正の後を追わせて帰って貰うように取計ったけれども僧正は行ってしまった。王はトゥリング・ピスイ (Turirga Pissī) 大臣をして僧正の後をなおも追わせた。

大臣は一策を案じ、仏像を船に積んで水路より僧正の後を追った。ついに僧正に追いつき、彼に言った「船の中に仏陀がおいでになっておられます。僧正様にお会いしたいとのことですから船までおこし下さい。」云った。大僧正は仏を拜むためにその船に乗り、仏(像)の前に頭をさげた。その間に船ははげしくパガンに向って進んで行った。王は僧正に自らの罪を認め、「訓戒を受けましょう」と言って詫言った。

これまでの王の行いを観察すれば、ナラパティシートゥ王には、ビルマ的に見て、次の6つの大きな誤ちが指摘される。

- (1) 王のため忠勤を励んだがンガビを処刑したこと。
- (2) 兄ナラティンカを殺害したこと。
- (3) ンガアウンゾワとの約束を破り、彼を処断したこと。
- (4) アナンタトゥリヤ大臣を処刑したこと。

(5) トゥバヤットの妻を占有したこと。

(6) 国民を重労働に使役し、その結果、大僧正の感情を傷つけたこと。

上述の如く、王の行為を総合すれば、ナラパティシートゥは短気ではあるが、すぐに怒りが和らぎ、後悔して善人に立返る型の人である。王位に即いた頃は怒りにまかせて事を為したが、後年には専ら功德に励み、国のため、人のために大いに尽した。そして、先祖アノヤーター王や祖父アラウンシートゥ王の如く、国内をあまねく巡視し、池、水道、運河等を各所に設け、パゴダの建立には特に意を用いた。

ナラパティシートゥ王の宗教事業

王が建立したパゴダは、パガンにはスラマニゼディ (Sulāmanizedi)、ゴードーパリン (Gawdaw Pallin または Kadaw Pallin)、ダンマヤージカ (Dhammayāzika-hpāyā:), チャウパヤーッラ (Hkyauk-hpāyā:-hla), ミマラウンヂャウン (Mimalaung-gyaung) 等¹、タイエツミヨにはミヤティンダン (Myatheindanzedi) とスウェドー (Swedawzedi)、モンユアにはゼディッラ (Zedihla)、チャウセにはパウンドーウ (Hpaungdaw-u-zedi)、シュエボにはシュエタザー (Shwetazā-zedi)、メイツ (英語名では Mergui) にはゼタウン (Zetawunzedi)、そして、シャン州のヨーンフウェにはシュエ・インディン (Shwe-indeirzedi) 等が主なるものであって、いづれも王が訪れた所々において入念に造営したものである。その建築様式、内部に奉納されてあるもの等についてもそれぞれの謂われをもっているものであって、今後の研究に資料を提供するものであると信じる。

仏教改革

ナラトウ王の時代にパンタグーはセイロンへ向ったが、ナラパティシートゥの即位の後、まもなくパガンに帰り、大僧正として迎えられたが、その時彼はすでに90才の老齢に達していた。その後、まもなくこの世を去り、彼に次いでパガンの大僧正になったのはタライン族の僧ウッタラジーワ (Uttarajiwa) である。

ナラパティシートゥが即位する数年前頃より、仏教はひどく窮迫しているらしかった。ビルマの小乗仏教も活気を回復する必要があると感じていた人々も多かった。そして彼らの仏教に対する改革熱はセイロンより帰国して今はパガンの大僧正となったウッタラジーワのセイロン仏教についての説明によって扇がれたに相違ない。彼は1180年セイロンに新しい勢力を求めるために多数の僧侶と共にバセインを出発し、しばらくの間、その国に滞在した後、帰国したが、彼らの中

の一人でタライン族の沙弥チャパタ (Chapata) (または Hsapṭa) のみはセイロンにて受戒し、その国で10年間修行した後、1190年に他の * 4 人の僧を伴ってビルマへ帰って来た。その中には * コンジェヴェラム出身者1名とカンボディアの王子も含まれていた。彼ら5人はニャウン・ウにセイロンのパゴダを模してチャパタ・パゴダを建立した。

チャパタが4人の僧侶を同伴して帰国した理由は * 具足戒 (Upasampadā) その他の会式を如法に行うための僧団の一単位として五衆 (Pañca-vagganā) を構成するためには5人の比丘を必要としたからであった。

- * 具足戒 (P. Upasampadā = full ordination) は比丘が受ける戒であって、沙弥 [P. sāmaṇero, ビ. thāmane; Sans. sramanera (室羅札尼羅)] はこの戒を受けてはじめて一人前の僧 (ビ. pazin:) となる。
- * チャパタと同伴した4人の僧の名は フマン・ナン・マハー・ヤーザーウインによれば、「パーリー註釈書に精通せるテマリッタ村出身の Shin Thiwali, カンボディア王子 Shin Tāmalinda, キンシプール (コンジェヴェラム) 出身の Shin Ānandā, セイロン島出身の Shin Rāhulā であった。」
- * コンジェヴェラム (Conjeveram) は昔の名をカーンチープラ (ビルマ名 Kinsipūra) といって、マドラス州チンレパトにあって、タミール地方の中心地であり、インド教の聖地として現在多くの巡礼者を集めている。5世紀頃ダンマパーラ僧正を指導者として活発な仏教教団の台頭した所であり、また、ビルマ文字の祖であるモン文字の原型であるパラワ文字がこの地方で行われていた。(学報12号「古代ビルマ概観」P. 105参照)

今やビルマの仏教史に新しい一僧団が生まれ、新しい思想と戒行をもってセイロンより来緬した5人の僧侶は従来まで行われてきたタトン仏教の流れをくむビルマ僧団を律 (Vinayo) に従ったものでなく、その受戒は如法に適しないものと見なして、ビルマ僧団とは戒行を修することを拒んだ。そして、1192年に別の一派を樹立したが、チャパタの死後、彼らの間に意見の対立が生じたため、三派に分裂した。かくて、シン・アラハン、即ち、タトン仏教を奉ずる元来のビルマ僧団は古義僧団と呼ばれ、それに対してセイロン僧団に属するものは新義僧団と呼ばれた。ウ・ミンハンはこの新しい僧団を Pisshima Hgaing : [= 後に起った僧団] と呼んでいる。それに対して古義僧団を Purima Hgaing : [= 以前よりの僧団] と呼んでいる。

ナラパティシートゥ王は新運動を助成して、ますます多くの僧侶をセイロンに送って、マハヴィハラ僧院にて受戒せしめた。しかし、このような両国間の交渉はビルマ仏教史上に最も大なる外国勢力を樹立せしめるに至った。

ナラパティシートゥ王の時代には名僧、学者、英雄等がかなり多く現われている。前述した人々の外に、次の人々についても述べる価値があると思われる。

ナラパティシートゥ王の祖父アラウンシートゥ王の時代に法典を編纂したダラ出身のシントー

リボッタラー僧正 (Shin Thāriputtarā-hter) はダンマウイラータの称号が与えられ、彼によって書かれた Dhammawilātha Dhamma-that は*マヌ法典に基いていると云われているが、ビルマ語にて書かれた最古の散文であり、12世紀のビルマ語の資料としてミヤゼディ碑文に次ぐ貴重なものとされている。

*「マヌ法典」は全篇12章2684条から成っているが、古代インドのいわゆる「法」は今日我々が考える法律の概念より範囲が広く、宗教、道徳、習慣をも意味しており、従って「マヌ法典」において相続法、婚姻法その他の今日の意味における法律的规定は全体の四分の一強に過ぎない、しかし、それだけに宗教的色彩が強く、むしろ宗教聖典として尊重せられ、各種の註釈がインドにおいて編述された。しかも、この法典の影響はインド文化を受容した東南アジアの各地に及んだ。(岩本裕氏：サンスクリット読本、41—42頁)

ビルマの仏教法典は Manu-Dhamma-sattham (ビルマ語では Dhammathat) と呼ばれており、ジャヴァには Manavasāstra と呼ばれる古代ジャヴァ語の法典があり、バリ島では今日もなお法典として用いられているという。

また、西欧では Sir William Jones が1794年に英訳し、Jonker, J. C. G. の Een out-Javaansche wethoek, vergeleken met Indische rechtsbronnen, Leiden 1885, の研究がある。邦訳では中野義照訳「マヌ法典」1951年高野山 田辺繁子訳「マヌ法典」昭28(岩波文庫)等がある。

また、大臣の中には刑法に関する書物を書いたマハー・タマン (Mahā Thaman:) や王の相談役をしていた智者ワジラボッディ (Wazirā-boddi), また、王や住民たちを危険な野獣や流賊から救ったために*アナンタトゥリヤ(前述した死の直前に Linga 詩を即興して、王に献上したアナンタトゥリヤとは別人)と呼ばれた英雄ヤンマンンガトゥエ (Yanman-ngahtwē:) 等も有名である。

フマンナンヤーザウィンの記するところによれば、「ヤンマンンガトゥエは、あるとき、王がシュエ・チエッ・イエッ・パゴダへ2本の傘を献上するために 御座船にて河をさか上った時、わにが王の乗っていた船をその背の上にのせて船の進行を妨害したので、水中にもぐって 剣でわにを突き殺し、また、ある時は虎や野象を単身にて退治した。また、王は彼に流賊や謀反人が王位をおびやかした際に彼らを撃たしめ、または、生捕りにさせた。彼はこのように腕力の強い人であったが、一面では、パウンラウンシン僧正 (Paunglaung Shin Mahā-hter) を師とし、王の代理として、パゴダや寺院の建立に尽力した。」とのことである。

彼はこのように功績があり、王の気に入りであったので、ゼヤティンカ(後述する)の妹と結婚し、王のためには現在のみでなく未来のためにも尽したということである。彼が建立したミンナントゥパヤー (Min : nanthu-hpāyā:) はよく知られている。寺院を冒す者に対する咒文の調伏法はビルマでは普通に行われていたのであるが、このミンナントゥパヤーの場合は特に怖い

もので、ヤンマンンガトゥエの呪文は全ビルマの法廷で宣誓文として用いられるほどである。

* 同名異人のアナンタトゥリヤを区別するために、書物によっては、前者をアナンタトリヤ大臣 (Ananta-thuriya-amat) と、後者を英雄アナンタトゥリヤ (Thāyègaung : Anantathuriya) と呼んでいる。

ビルマ対セイロンの戦闘

今述べようとするこの事件についてはビルマの史家はみな沈黙を保っている。そこで、英国人の記録より資料を得て、その大略を紹介しようと思う。まづハーヴィの「ビルマ史」には次のように記されている。

「セイロン王はビルマのバセインの港に駐在官らしきものを置いたが、それは確かに貿易に關聯してのことであつたに相違ない。東洋諸国の例にならつて、ビルマ側はそれに米と宿舎を提供していたが、ナラパティシートゥはこの供給を停止し、法外な税を支払う場合は例外として、象をセイロンに輸出することを禁じ、王の進物を積んだ船に各一頭の象を贈り物とするしきたりを廢止し、セイロン商人を投獄してその物品を差抑え、セイロン王の使者を捕えて彼らを浸水する船に乗せて海に放ち、ついにはセイロン王女さえも拉し去った。これらのことに対する報復として1180年、セイロン王は遠征軍をビルマに送った。遠征軍は暴風雨に遭い、ビルマに達した船は数隻にすぎなかったが、これらの船はバセインやモールメインの近くの烏島 (Crow Island, ビルマ名不明) を襲い、その地方の太守を殺し、部落を焼き、住民を虐殺し、多くの人を奴隸として運び去った。そこでビルマ側は僧侶を介してセイロンに和を求め、友好關係を回復した。」(Outline of Burmese History, P. 45)。

また、アーサー・フェアーの “History of Burma” には次の如く記されている。

「彼 (ナラパティシートゥ) の治世中、種々な事件が勃発したが、それらについてはセイロンのマハワンサには記録されているが、ビルマの編年史には何ら記すところがない。マハワンサには、セイロンの王パラクラマ (Parakrama) が当時ビルマ、即ちパガンの王に隸屬していたペグーの王と親善關係にあつたことが記されている。當時はセイロン王はペグーにその代理者を置き、その費用はパガン国王によって支辨されることが慣習となつてゐた。しかしビルマ王 (ナラパティシートゥ) は定まつた支払を停止し、カンボヂアへ行くセイロンの使者を妨害し、その船を差押え、その他様々の不法行為をセイロン王の部下に対してなした。大勇者であつたパラクラマはこの侮辱に対して復讐せんと決意し軍隊を送つた。この軍はウッカカ (Ukkaka) —— これは恐らく今日のトワンテ (Twante) の近くの古都であるウッカラバ (Ukkalaba) であらう—— に上陸し、ペグーの太守を虜とした。ビルマ側は屈伏し、象の献上を約束した。この事件の重要性が恐らく

セイロンの歴史に誇張されたものであろうが、決して虚構ではない。ビルマ史家の沈黙はこの事件がビルマ王にとって名誉でないことを暗示している。」

以上の2人の英国史家の記述は大たいにおいて共通している。ただセイロン軍が劫掠した地域がハーヴィではバセイン及びモールメイン附近であり、フェヤーではペグーとその周辺になっているだけで、それぞれの地域はそれほど距ってはいない。その他の点に関しても記述がそれほど相異してはいない。

ビルマ史家の記録と英国史家の記録では、これまでに見うけられた如く、また今後も見うけられるであろうが、ビルマ人が全くふれていない所にヨーロッパ人がかなり詳細に述べている事柄や、またその逆にヨーロッパ人が述べていない事柄をビルマ人は鮮明に描いている事柄があって、どちらか一方だけの記録ではかなりの gap が生じている。かつてあるビルマ人が「英人の書いたビルマ史は全く信頼できない。我々はそのため大そう迷惑を蒙っている。」と言うのを聞いたことがある。しかし、英人とても全く根拠のない事件を虚構しているとは考えられず、ビルマ史以外の記録より資料を得ていることは事実である。ビルマ人も彼らにとって不名誉な事件は極力これを知られることを避けたいという気持は理解できる。しかし実際には信頼するに足るものをつかむことが最重要であるから、多方面より調査研究する必要がある。中国語にて書かれた資料も大いに参考となるであろうと信ずる。ただビルマ人以外の人の書いたものの中ではどうも真のビルマ人が描かれているように思われない気がするが、これは私だけの感じであろうか。

ナラパティシートゥ王の最後

ウ・オンマッが述べているところによると、王はある園庭師の美貌の娘を娶って後宮に入れた。あるとき王が指に瘰癧(hkūnā)をわづらったとき、彼女はその患部を吸って痛みを和げていた。ある日、彼女の看護中に王が眠ってしまったので、目を覚まさないように彼女はその膿を吐き出さずに呑みこんでしまった。王は彼女の心づかいを知り、彼女の真心に対する感謝の印として彼女の望むものを与えようと言った。彼女はその子ゼヤティンカ(Zeyatheinhka)を王の世継ぎにしてほしいことを幾度も懇願したので、王は彼女の願いを入れ、ゼヤティンカを王子たちの首位においた。

ナラパティシートゥ王はウェルワティー女王より生れたゼヤトゥル(Zeyathūr)と園庭師の娘より生れた末子ゼヤティンカを含めて5人の子があった。他の3人の名はヤザトゥル、ギンガトウ、バンチャーと呼んだ。ゼヤティンカ王子は父や4人の兄を尊敬していたので大そう愛されてい

た。

王が5人の王子のうちより世継ぎを選ぶのに 次の方法を採用したことを ウ・ミンハンは述べている。「王は5人の子を白傘(“hti:-hpyū” はビルマ王家を象徴する)の周りに集め、白傘よ、王に値いする者の方へ傾かんことを、と祈ったところ、末子ゼヤティンカの方へそれが傾いたので、ゼヤティンカを王位継承者に定め、他の王子たちもこれを承服した。」

その後、王は健康すぐれず、老衰の境に入ったとき、息子たちを呼び寄せ、それぞれに領土を分け与え、今後も互いに睦まじく助け合っていくように訓し、女王や王族高官たちにも王子たちに対して協力援助を頼んで、74才にてこの世を去った。

ナラパティシートゥ王は誓いを守り、王としての義務をよく果した。彼は国民に愛され、仏教のため、衆生のために尽した王であった。

第49代ゼヤティンカ王 (Zeyatheinhka-min:) (1210—34)

ナラパティシートゥ王の後、ゼヤティンカが王位に即いた。ゼヤティンカ王は別に3つの呼名をもっていた。その一つは、既述した通り、彼の母が先王に幾度も懇願した結果、王位に即くことができたことから、ナン・タウンミヤ・ミン(Nan: Taung: myā: Min: = 「幾度も(王位を)乞い願うてなった王」の意)という名と、もう一つの呼名はウザナー(Uzanā)といってパーリー語 Uccanātha (ucca=気高い、優れた)+nātha=「礼拝すべきもの、王、仏」より来ている。(第51代の Uzanā 王も同名であるが、別人)、なおもう一つは、白傘が奇蹟的にも彼の方に傾いたために彼が王位に即くことに決定したことになんで付けたティロミンロ(Hti: lo min: lo= 傘も(先)王も望んだ王」の意)という名であった。

彼はその白傘が傾いた場所にパゴダを建立して、ティロミンロ・パゴダと呼んだ。それはスラムニ・パゴダを型どって建てられたパガン最大のパゴダのうちで最後のものであった。また父王が未完成のままに終ったゴードパリンを完成し、またボッドガヤーの寺堂を模してマハーボディ寺をも建てた。なお、ネヤバン・パゴダ(Neyaban-hpāyā:) やセダナー・パゴダ(Sedanā-hpāyā:) または、Sit-tarā:-hpāyā:) も彼の建立になる有名なパゴダである。

彼は父王が訓した通りを実行して4人の王子と協力して国を治めたので、彼の治世間は平穩無事であった。

ゼヤティンカ王は4人の兄弟に事実上の王権を委ねた。そして宮廷の近くに会議所を設け、この4人は毎日集って会議を開き、国務について論じ会った。王も絶えずこれに出席し、兄弟たちに武器や糧食その他を捧げた。これが Hluttaw yon: (ビルマの大審院)の濫觴であると伝えられ

る。Hluttaw yon : という語はゼヤティンカ王の時代にできたらしいとウ・ミンハン は述べている。その時代のビルマ語では hlut = 「捧げる, 礼拝する」 + taw (敬称を表わす助辞) + yon : = 「集合, または, 集まる場所」(現代語では「法廷」)を意味した。しかし, この種の会議はゼヤティンカ王以前より行われていたものであると主張する人もある。ハーヴィはそれについて, 次の如く述べている。

Hluttaw は1885年イギリスのビルマ併合の時まで存置されていた。事実上国務の万端を執行したものであって, 王といえども, この会議の決定を覆すことができなかった。しかし, その構成員は王によって指名された者に限られ, 彼らは王に対してのみ責任を負い, 王はまた任意に彼らを罷免したり, あるいは, 投獄する場合もあった。その間, この重要な会議は閉されたままの状態であったりしたために, これは一つの制度にまで発達することはできなかった。

ゼヤティンカ王は賢明, 忍耐, 沈着等の諸徳を具現し, 常に教養の高い礼儀正しい言葉を話したため, 国民や僧侶は彼を敬愛した。パゴダや寺院を拝することが屢々であり, 彼の治世間暴動は全く起らなかった。国は常に平和と幸福でみなぎっていた。

第50代チャゾワ王 (Kyazwa Min : 1234—1250)

ゼヤティンカ王に次いで, その子チャゾワが王位に即いた。王はよく一切経に通じ, 9回もそれを転読したそうである。王の称号として与えられた Kyazwā という名は Kyanazwā (=「(經典に)通曉せる」)の意味より由来している。王は国政には関係せず, 彼の子で王位継承者であるウザナー (Uzanā) に委し, 彼自身は専ら仏教經典の研究に没頭した。そして宮廷の侍女たちのために信仰の書 “Paramatta Bindu-Kyan:” : 及び “Sadda-Bindu-Kyan:” とその註釈書を著した。また, 住民のためにトゥユイン山の麓に大きい人造池を造営し, 近隣の田畑を増した。

王は劍舞の際に劍に傷ついて死亡した。この王に関して, ウ・ミンハンは次のように述べている。

「チャゾワ王はアノーヤター王の化身としてこの世に生れ, 前世において ピエッカユエ山に植えられた棕櫚の樹がいつの日かチャゾワ王の生命の中に 成長せんことを, と祈られたとのことである。」

第51代ウザナー王 (UzanāMin :, 1250—54)

チャゾワ王の死後, その子ウザナーが王位に即いた。ミンシンゾー (既述, 学報第16号72, 73頁)

の孫娘に当る第1女王よりティハトッ (Thihathu) が生れた。また、王はミッター村の轆轤師の美貌の娘を娶って、後宮に入れたが、彼女よりミンコエチェ (Min : Hkwē : hkyē ; 後のNarathī-hapate) が生れた。

当時、王は Natdaw-la (日本の12月に当る 月) になると、ポッパ山へマヘギリナッ神 (第12号, 104頁参照) の礼拝に出かけるのが慣行となっていた。ポッパ山の北側にティンカンピュー村があったが、そこの村長の娘を見た王はすぐれた容貌をもっていたため彼女をも後官に入れた。その女は美貌のみならず優れた智恵をももっていたので大いに王の気に入った。この女に関してフマンナンヤーザウインの記するところによれば、「ミパヤー・ボアソ (Mihpāyā : Hpwā : saw) という名を与えられたこの女性は幼い頃、父につれられて畠へ行き、父が仕事をしている間、樹の下で眠っていたところが、一匹のコブラがどくろを巻きながら、そのかさ状の頭部で彼女を覆いまもっていたことや、また、12才の時、彼女が植えたジャスミンの樹にポンニェツ (Pon : nyet = calophyllum), サガー (Sagā : = champac (きんこうぼく)), チャヤー (Hkyayā : = Minusops) の3種類の花が咲いたということである。これは彼女が将来最も優れた人物になるであろうという不思議な徴候の現れであると当時の智者たちが語った。」と述べられている。

ミパヤー・ボアソについてはなお後述する。このような徴候については、第36代サレー・ンガコエ王の場合 (学報第12号, 106頁) にも似通った例が見られるが、ナツ信仰の影響によるビルマ人の経信性が示されている。

ウザナー王は父王の頃より象狩りを楽しんでいて、ドラにて象狩りの最中、不慮の死を遂げた。

第52代ナラティハパテ王 (Narathihapate-min :, 1254—1287)

ウザナー王がこの世を去った時、彼には第一王妃の子として生れたティハトッ (Thihathū) と轆轤師の娘であった側室の子として生れた ミンコエチェとの二人の子があったが、そのうちミンコエチェがナラパティハパテという名によって王位に即いた。

ティハトッが第1王妃の子として生れ、父王ウザナー王の存命中はティハトッが王位継承者と決められていたのであるから、当然ティハトッが王の世継ぎとなるべきはずであった。ところが彼が王位に即くことを容れられなかった原因は次の事情によるのである。

ある時、ティハトッは宰相ヤーザティンヂャン (Yāzathin : gyan) の後から歩いていたが、ヤーザティンヂャンはそれに気がつかず、王子ティハトッに挨拶をしなかった。王子はその事に腹

を立て、ヤーザティンチャンの衣服の袖に *蒟醬^{きんま}を吐きかけた。

* 蒟醬 (Kwun : -thi:) =びんろう樹の葉にびんろう^じ子と少量の石灰とを混じた一種の嗜好品であって、ビルマ人はこれを常習的にかみ、その真赤な液を吐き散らす風がある。

ヤーザティンチャンはその蒟醬で汚れた衣服をそっと箱にしまっておいたが、その後、ウザナー王が突然世を去ったことによって王位継承問題が起ったので、宰相ヤーザティンチャンはドラにて父王の葬式を行うようにと言ってティハトウをドラの地に赴かしめ、その間に、ヤーザティンチャンは大臣・村長たちを集め、彼らの面前にてその汚れた上衣を見せ、王子の頃より長上に對してかかる行為をなしたティハトウは王たるの資格なしと主張して、ティハトウが王位に即くことに反対したので、大臣・村長たちもそれを認めた。従って、ミンコエチエを王位に立てるように計画し、またミンコエチエもその恩に報いようと言った。ティハトウがドラより首都パガンに帰ってきた時、大臣高官たちは彼を捕えて監禁し、ミンコエチエを王位に即けた。

しかしながら、ミンコエチエがナラティハパテを名乗り、王位に即いてからは、その約束を忘れ、ヤーザティンチャンに目をかけなかった。ヤーザティンチャンは心の中に不快を感じ、こわれた蒟醬入れの箱をもって宮廷に登ると、王は、

「ティンチャンよ、なぜそのこわれた蒟醬の箱で（きんまを）食べるのか。」と尋ねた。ヤーザティンチャンは、

「王よ、轆轤師の孫が高位に就いたため蒟醬の箱を作る職人に不足してきましたので、このこわれた蒟醬の入れ物で食べねばならないのです。」と答えた。

ヤーザティンチャンがこのように言ったのはナラティハパテ王が元を正せば、轆轤師の娘であった側室が彼の母であることを暗示し、彼の血統を卑めて言ったのである。

王は立腹し、反問して言った。

「ティンチャンよ、バゴダの塔上に傘蓋を据えるにはどのようにして置くのか。」と。
すると、ヤーザティンチャンは答えて、

「櫓を組んで据えます。」と。王は再び尋ねた。

「傘を据え終れば、その櫓はどうするのか。」

ヤーザティンチャンは答えた。

「櫓を取とこわしてしまえばよろしい。」と。

そこで王は、

「朕はあだかも傘のようなもので、大臣である汝は櫓のようなものだ。朕は王となり、塔の頂に達した。櫓である汝（大臣）を取り除かねば九輪の優美さは楽しめない。」と云って、ヤーザテ

インジャンの象も奴隸も家来をも奪い、宰相の職よりしりぞけてドラへ追放した。

ヤーザティンジャンはイラワディー河を下る途中、暴風雨が起って、大木は折れたが、しなやかなしょうぶは折れずに、ただ曲がるだけであることを見て、自分の状態を悟り、「あゝ、我にはしょうぶほどの智慧もなく、大木の如く振舞ったためこのような憂目を見るに到った。」と後悔して嘆いた。

ヤーザティンジャンがいなくなったパガンに対しては敬意を払わなくなり、各地に反乱が相ついで起った。まずモッタマ (Muttama, 英語名 Martaban) とミッサギリ (Mishsagiri, アラカン山脈地帯, 英語名 Macchagiri) において反旗がひるがえされた。王は頼りにしていた相談相手のヤーザティンジャンがいないので困まってしまった。そこで部将 タイエピッサパテ (Thayepissapahte) にミッサギリを攻めさせた一方、ボアソー王妃の言を容れ、ヤーザティンジャンを呼び戻してモッタマを鎮圧せしめた。ところがミッサギリを攻めたタイエピッサパテは計画に失敗したため、ミッサギリに到着しない内に彼の軍は敵を恐れて退却した。王は逃げ帰ったタイエピッサパテの処刑を命じたが、この時ヤーザティンジャンは彼のために猶予を乞い、モッタマの反乱を鎮めたことを王に報告して王の怒りを和らげた。ついで彼は自ら討伐軍をひきいてミッサギリに向い、叛乱を平らげ叛徒の首謀者たちをパガンに送った。彼らは前非を悔いてゆるされた。しかし、ヤーザティンジャン自身はついにパガンへは帰らなかった。彼は王のために粉骨砕身忠勤を励んだ後、62才にして熱病のためドラにて没した。

ヤーザティンジャンの病死の報せをきいて王はその遺功を追憶して胸を痛めた。

父王ウザナーの側室であったセイティンカンピュー村の娘をナラティハパテ王は第1王妃 (Mihpāyā:gyi := 「大女王」) としてボアソー王妃と呼んだ。彼女には子が生れなかったが、この王妃の他に5人の下位の王妃 (Mihpāyā:nge = 「小女王」) がいたが、その名はソールン、ソーナン、シンパー、シンマウ、シンシュエと呼んだ。ソーナンより生れたウザナー (Uzanā, 51代のウザナー王と同名別人) はバセインの太守となり、シンパーより生れたチョウゾワ (Kyawzwā) はドラの太守となり、シンマウより生れたティハトゥ (Thihathū, 51代ウザナー王の第1王子と同名別人) はプロームの太守となり、シンシュエは女の子ソーウ (Saw-U) 王女を生んだ。

ナラティハパテ王は、王子たちをその封土に放任しておいては彼らがいつなん時謀叛を起すかも知れないことをおそれ、彼らを宮廷内に起居せしめた。「フマンナンヤーザウィン Vol-1, p. 383 に述べられているところによれば、王は彼らと食事を共にする時には、豚の後脚はプロームの領主であるティハトゥ王子に、その前脚はティハトゥの兄たちにあたえるのが常であった。し

かし、ティハトゥの母シンマッはこのことが自分の子を侮辱するものであると解し、料理人を買収してティハトゥには前脚を、そして異腹の王子チョウゾワに後脚をあたえさせた。チョウゾワの母シンパーはこのことを知り、王に告げたので、王は料理人を罰し、それ以来ティハトゥを揶揄して「豚脚盗人の子」と呼んだので、ティハトゥは深く王を恨んだ。

ガラにて病死したヤーザティンジャンの遺子兄弟オッフラデーとオッフランゲーは、いずれが父の名を継ぐべきかについて争ったので王は彼らを論して「偉大なるは彼の功績であって彼の名前ではない。汝らのいずれも功によってその名を得るまでは父を襲名すべきではない。」と云って兄にはアナンダピシ (Anandapissi:)、弟にはヤンダピシ (Yandapissi:) という称号をあたえて、それぞれを部将の地位につけた。

ナラティハパテ王はパガン王朝最後の勢力のあった王で、その後2、3代のうちにパガン王朝は滅亡して行った。ウ・ミンハンはナラティハパテ王の前世について次のように語っている。

「この王はビルー（学報14号18頁参照）の生れ変りであって、第36代サレーンガコエ王やカラージャ王（ナラトゥ王の別名）たちの化身としてこの世に生れ、短気、大食、どん欲等の性質をもち、政治に関しては先見の明がなく、簡単に人を罰した。」しかし、賢明な王妃ボアソーの言葉にはよく耳を傾け、パンタグー大僧正 (Panthagū Mahāhter, シン・アラハンに次いでパガンの大僧正となり、ナラトゥ王の時代にセイロンへ去ったが、ナラパティシートゥ王の時にパガンへ帰って再び大僧正になった人と同名であるが別人) を尊敬し、彼の教義に耳を傾け、また誤ちを悔い改めるところもあった。

短気、大食、どん欲は愚に通ずるものであると思われるが、ナラティハパテ王も王として理解力が少かったようである。王はしばしばボアソー王妃が掛ける謎を解くことができなかったことがあった。その一例を、“U Thein : Han ”Pyi-htaung-su Thamaing : Ponpyin-myā : , p. 30, 31, 32” よりあげると、

“Pyi-won : go ma-hpauk-yā, Pyi-ū : kin : go ma-hnein-yā, Pyi-tagon go ma-hlè-yā, Pyi-myet-si go ma-hpauk-yā, Pyi-zwe go ma-hkyō : yā, Pyi-myet-hnā go ma-hpyet-yā, Pyi-hkye-pyi-let go ma-hpyat-yā,……”（直訳：国のお腹を断ち切ってはいけません。また国の頭をおさえつけたり、国の旗を倒したり、国の眼をくりぬいたり、国の牙を折ったり、国の顔をつぶしたり、国の足、国の手を切り取ったり、するようなことは一切慎んでください。……）と王に向って言ったボアソー王妃の比喩を彼はどうしても理解することができなかったのを王妃は次の如く説明している。

“Pyi-won : (国のお腹) 即ち、金持ちの商人を理由もなく罰したり、彼らの財宝を没収しないように、Pyi-ū : kin : (国の頭) 即ち、大臣高官たちを短気を起して考えもなく処断しないように、

Pyi-tagon（国の旗）即ち、智者や学者たちの言うことに腹を立てないように、Pyi-myet-si（国の眼）即ち、僧侶やバラモンの占星術師たちにも腹を立てないように、Pyi-zwe（国の牙）即ち、王の兄弟や王子たちにも腹をたてないように、Pyi-myet-hnā（国の顔）即ち、市民の子や娘を王の思うがままに連れ去らないように、Pyi-hkye-Pyi-let（国の手足）即ち、兵士たちを、現在未来の二つの世界のことを考えず、殺生しないこと……”

と訓した言葉に王は痛い所をつかれたので、それまでの所業を反省し後悔したということである。

ナラティハパテ王が食慾旺盛の美食家であったことはよく知られている。一日の食事に300皿を食したことが、大ていのビルマ史に記されているが、「この記述は王の建立になるミンガラゼディ・パゴダの碑文中にも見出される」と Harvey も述べている（“Outline of Burmese History, p. 49）。もちろん、それを全部食べ切ってしまった訳ではなく、種々の料理を試食したことを意味するものであろう。または、自分の栄養栄華を見せびらかすことを欲したとも考えられる。とも角、王は健康が特にすぐれていて、病氣にかかったことはなく、せきをしたことさえなかったとのことである。また王は3千人の妾をかかえていたということである。（Hmannan：Yāzawin, p.380）王には奇妙な性癖があって、眠りから目を覚ますと、近くにあるものを手当たり次第に妾の誰かに投げつけて、気を晴らすのが常であった。そこでボアソー王妃は刃物その他の危険な道具を王の寝床の近くに置かず、茄子を置いておくように命じた。ある時、王は目を覚まして、近くにあった茄子を1人の妾めがけて投げつけたところ、それは女の腰に当り腰が脹れ上ったという。（p. 381）当時、茄子を lonpanī-di：と呼んでいたが、それ以来、hkayan-di：（<hkā=腰+（yaung）yan：=脹れ上る+di：=果実）と呼ばれるようになった。現在、lonpanī-di：という語はほとんど用いられない。

王がせきをしなかったことは既述した通りであるが、王の面前で誰かがせきか、またはあくびをすると大いに立腹した。しかし、その後、王妃ボアソーやその他の人々の訓誡に耳を傾け、人の健康についても話をきいたらしい。かって、妾の一人が王の面前にて、くさめが出そうになり抑えきれず、王に聞こえないようにつぼの中に顔をかくしてくさめをしたところ、つぼの外でするよりも高い音がしたので、それが王に聞こえ、王は何の音であるかと従者に尋ねると、それはミパヤソーが発したくさめであることを知った。以前ならば、王はそのようなことに対して立腹したであろうが、周囲の人々の健康について知ることになった今はそれについて何のともがめもしなかった。このような事にも次第に王の性質がやわやぎ、人を理解しようと努力するようになったことがうかがわれる。

ソールン女王 (Mihpāya : Sawlun)

王は河辺にバラック小屋を建てさせ、仕切りを設けて、女王や女官たちと共に水浴に興じることを常とした。夏のある日、王は宮廷を出て、河辺に達し、水遊びを楽しんでいたが、その時、冗談のつもりで女官の一人に口へ水を含ませて ソールン女王の髪をびしょ濡れにするほどに水をかけさせた。ソールンはそれを恥じて、その仕草に対して王を怨んだ。「悪ふざけは敵を作る。」(Akyi zā : than—yan) というビルマの諺がある如く、ソールンは王に対して復讐を計った。そこで、彼女は王の食事の際に王の食事に毒を盛った。王がそれを食べようとした時、食卓の下にいた犬がくしゃみをしたので、何か不吉な徴候が現われているのではないかと感じて、すぐに食事をとらずに、犬にその食事をあたえたところ、犬はそれを食べると即座に死んだ。調べて見るとソールン女王の仕業であることがわかったので、ソールンはそれを隠さずに王に向って、「ろくろ師の孫に当る王さまよ、私はあなたの幼い頃より世話をし、現在に至るまであなたのために尽してきたのに、あなたは女官の一人に言いつけて私の衣から髪までもびしょ濡れにさせて、多くの人の前で私に恥をかかせたでしょう。それを怨んで、私が計画したのです。」とはっきり王に向って言った。このように故意に王の感情を傷つけるように言ったことは ヤーザティンジャンの場合にも見られるが、ビルマ人の男女を問わず、その性格の一端をよく表わしている。

王は大いに立腹し、ソールンを鉄炙刑に処するように命じた。鉄炙を造る間の7日間ソールンは戒律を守り、仏典の教えに従い殊数をつまぐった。7日間が過ぎて、臆するところなく、鉄炙の上に登った時、火が3度消えたそうである。彼女は仏に祈りつつ焼死んで行った。ソールン女王の死後、王は大そう後悔して、就寝の時、しばしば「ソールンよ、我を見守ってくれ」と叫んだということである。このように大いに悲しんだあげく、ポアソー王妃に伴なわれて王の師である大僧正の元へ行き、法をきくことによって心を慰めた。その時以後、王は「たとえ自分が処刑の命を下しても、10日間から15日間はそのままにして、その事を調査した上処刑すべき場合は処刑せよ。」と伯父に当るテインマスィーに言いつけた。この処刑は先きにナラパティシートゥ王がアナントトゥリヤ大臣（死の直前に4音節詩を王に献上した人）を処刑した時にも、その後、部下に処刑の事情を十分に調査した上、行うように訓した場合と似ている。

また王のからかいにソールンが大いに感情を害した結果、このような極く小さい事よりソールンが死なねばならないことは悲しむべきことであるが、些細なことに怨恨を懷いて復讐の企らみをすることもビルマ人の為しそうなことである。話しは少しそれるかも知れないが、第2次大戦中、ビルマ戦線にて日本の1兵士が1人のビルマ人をからかったことから、そのビルマ人が日本

軍の輸送車顛覆を計ったことの例を見ても 解る通りビルマ人の 性格の一面をうかがうことができる。人前にて恥をかかされることをビルマ人は極度に嫌うのである。

ミンガラゼディの建立

王はミンガラゼディの建立に6年を費したが、「仏塔成って大国亡ぶ。」という流言が国中に拡がり、占師たちもまた、「この塔の完成するとき、パガン王国は崩壊するであろう。」と言ってこの流言を確認したので、王は心配の余り工事を中止した。しかし、パンタグー大僧正は、「人生は無常である。たとえこの仏塔成らずとするも、王宮また何ぞ無窮なるを得ん。功德を施すに何の心配あるや。」と言って、王を諫めたので王はその工事を継続した。かくて、この仏塔はビルマ暦636年に竣工を見たのであるが、それはビルマでは普通に見られる様式の 大率塔婆であるが、その粗雑な出来栄えは如何にも一国の滅亡を象徴するものの如くである。あだかも、代々のビルマ人が自ら大伽藍建立の功德を積むことができないくらいならば、むしろ一切の物質的繁栄を放棄するに如かずと考えきたったかの如くに。

当時シャン族たちは南方への移動をはじめつつあったが、しかしビルマの民は平和であり、広大なる地域にわたって住むべき民もなく、僻遠の地方に散在する民にはほとんど 名目上の支配者に過ぎない中央に対して敢て反旗を翻す必要もなかったから、もしビルマが 外寇を蒙ることがなかったならば、パガン王国もなおいくばかの命脈を保ったかも知れない。しかしパガン王国永久の安泰は竟に期すべくもなかった。

参 考 文 献

- Hman-nan : Mahā Yāzawin Vol. 1.
U Hpō : Kyā : : Myanma Yāzawin Akyin : (1937)
U On Maung : Myanma Yāzawin Thit (1953)
G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
D. G. E. Hall : Burma (1950)
U Min : Han : Myanma Naingngan Hket-laik Yāzawin (1937)
U Hpe Maung Tin : Myanma Sāpe Thamaing : (1955)
U Thein : Han : Pyi-htaung-su Thamaing : Ponpyin-mya : (1957)
UOn : Shwe : That-Pon-Abhidān (1956)
高楠順次郎編 : 巴利語仏教文学講本 (昭2・4・20)
Jndson : Bur-Eng-Dict (1953)
アーサー・フエヤー : ビルマ史 (昭18年)
岡村武雄 訳 :
サンスクリット読本 岩本裕編 (1957)